

瞬間・同時性・持続 — ベルクソンと行為的時間 —

木 岡 伸 夫

ベルクソンの持続概念の内在批判をつうじて、行為的時間に関するひとつの見取図を描いてみたい。行為とは何か。時間とは何か。これらの問題を考えるとき、行為と時間との関係が併せて問題となる。私は、あるときはためらい、あるときは決断し、あるときは反省するといった様々なかたちで、不断に行為する。行為の諸局面において、時間の独自の相貌が私に印象づけられる。私とともに立ち止まったり、私と一体になって流れたり、あるいは私の傍を留めるすべもなく滑り去るもの、それは私にとって単なる形式ではない「生きられる時間」である。

バシュラールは、行為的時間の観点から『瞬間の直観』⁽¹⁾を著して、ベルクソンの持続を批判した。彼にとって、行為の時間的契機は何よりも瞬間性にあった。この論点は、ベルクソン解釈の試金石となるだろう。そこで、バシュラールの議論の有効範囲を確認することから始めたい。

I

時間の実体は連続か、それとも非連続か、という図式的思考を論理的に貫徹しようとすれば、持続と瞬間とは、一見両立しえない時間性であるかのように思われる。しかし、われわれの時間経験全体に照らしてみても、時間は持続だから瞬間は存在しないとか、逆に時間は瞬間だから持続は成り立たないというふうにならねばならない理由があるだろうか。連続と非連続との関係を、いずれか一方に還元しなければならない理由があるだろうか。もしも、あると考えるとなれば、それは概念のレベルで瞬間を点として、持続を直線として、想像するからである。

最初にこのような注意を述べたのは、バシュラールの瞬間説には、具体性のレベルと抽象性のレベルが重なり合っていることを指摘するためである。バシュラールは、「時間のもつ現実性は、瞬間（instant）のみである」（II 13）という主張を、一貫して展開する。その議論は、時間という現象が瞬間において構成されること、連続が非連続に還元されることを説明する。「時間は、瞬間に凝縮され、二つの無の間にぶら下がった現実である」（II 13）、「持続

とは、瞬間が統一するひとつの数である」(I I 38)等々。これらの命題は、バシュラールの思考の抽象化されたレベルを表わしている。個々に取り上げてみれば興味がなくはないけれども、その必要はあるまい。大事な点は、「時間が瞬間である」という主張によっても、持続は否定されないということ、いいかえれば、抽象的思考が現実的具体的なものを追放しえないということである。「時間は、持続なき瞬間の規則的密度によって持続する」(I I 68)といった逆説をとらえてみても、この点は明らかだろう。

だとすると、バシュラールが「持続の哲学」に対抗して「瞬間の哲学」を提示した狙いはどこにあったのか、これが問題である。主たる動機のひとつは、相対性理論の時空概念を認識論的に基礎づけることであった。だがそれについては、小論では立ち入らない⁽²⁾。それと並ぶ、むしろ一層重要な動機は、初めに述べた行為の問題に関するものである。「じっさい瞬間がもしも虚偽の区切りであるとすれば、過去と将来とは常に人為的に分離されるのだから、過去と将来を区別することは、まったく困難になるだろう。それゆえ持続は、壊れることのない統一として理解しなければならない。そこからベルクソン哲学のすべてが帰結する。すなわちわれわれは、一々の行為、ささいな振舞の中に下書きの完成された特徴を、開始の中に終末を、胚の躍動の中に存在とその生成のすべてをとらえることができるだろう」(I I 18)

ここで主張されているのは、(1)ベルクソンの持続は瞬間 (instant) を含まない、したがって、(2)行為を開始したり終えたりするための区切りがない、という二つの点である。バシュラールのベルクソン批判を、この二点だけに絞って検討してみよう。

まず(1)について。ベルクソンは確かに次のように書いている。「実の時間 (temps réel) は瞬間 (instant) をもたない。しかし、時間の空間への転化が習慣となるや、瞬間の観念および同時的瞬間の観念が、自然に形づくられる。というのは、持続は瞬間をもたないにしても、線は点によって区切られるからである。そして持続に線に対応させるとき、線の部分には〈持続の部分〉が、線の終りには〈持続の終り〉が対応しなければならない。これが瞬間となろう」(D S 68 - 69)。瞬間 (instant) は、実の時間つまり持続の内には存在せず、空間化された時間、虚の時間 (temps fictif) の内に成立するのである。

だが、同じベルクソンの次のような記述に目を留めていただきたい。「注意深い心理学は、真の持続の外延的記号である同質的な持続の下に、異質的な瞬間 (moments hétérogènes) が互いに浸透し合っている持続を見分ける」(D I 95)。ここでは、持続そのものの規定に、instantの類義語であるmomentが用いられている。異質的であるmomentは、instantとは対照的に非空間的であり、「数的多を構成しない瞬間」(D I 102)なのである。

instantとmomentが日常的な用法ではほとんど区別されないこと、現にベルクソン自身も

レトリックに従って混用していることは、ここでは、気にかける必要はない。momentが持続の内なる瞬間性であり、instantが持続の外なる瞬間性であるということの、本質論的射程だけが問題だからである。momentとは何か。instantとは何か。また、momentとinstantとの間に、意味上のいかなる連関や統一が存するのか。この疑問は、つまるところ、持続と空間の本性および相互の関係を説明するという課題を呈示することになる。

さてそこで、バシュラールの批判する(2)の論点に転じよう。見たように、持続は異質的で相互浸透的なmomentからなり、したがって瞬間性と無縁ではないといえる。バシュラールにとって、行為は「時間のアトム」である瞬間instantにおいて決定される。ベルクソンの場合には、かかる時間のアトムズムは前提されていないが、だからといって行為的瞬間が存在しないということにはならない。momentとinstantとの対応、持続と空間との関係において、事実的な行為の瞬間性が説明されるという可能性が考えられるからである。

この問題を考えるさいに、特にひとつの注意が必要である。ふつうベルクソンの時間論といえば、だれしも「純粹持続」(durée pure)である内生的流動を連想するであろう。「要するに純粹持続とは、溶け合い浸透し合う質的な変化の継起に他ならず、そこにははっきりした輪郭がなく、互いに他に対して外在化するいかなる傾向もなく、数とはいかなる類似もないであろう。それは、純粹の異質性であろう」(DI 77, 強調筆者)。ごらんのとおり、この規定は否定性に彩られている。持続の規定は、端的にいつて空間の規定を裏返したものである。このことは何を意味するか。持続は、空間性の否定である限りにおいて、時間と考えられているということである。たとえば直線的時間の観念の如きも、「虚の時間」とされるのは、それが空間表象を支えとするためである。

ベルクソンはもとより時間を探究するが、むしろそれ以上に持続を探究しているといえることができる。それは、持続の存在論的地平が一般的な時間論の枠を超えていること。またそれゆえにこそ、純粹持続が時間の成立契機であるということを物語っている。すると、空間の否定としての持続、持続の否定としての空間、この両者の間には、特別な関係いわば〈弁証法〉が考えられないだろうか。弁証法はともかく、少なくとも持続と空間との連関において、生きられる時間ないし行為的時間に固有な位相をとらえることは正当であるといえよう。注意すべきは、この点である。すなわち、「時間とは持続である」という主張とは別な水準において、われわれは空間性が条件となるような行為的時間を考えることができるのである。

II

バシュラールの批判に対する返答を、簡単にまとめてみよう。(1)ベルクソンの持続は、それ

自体瞬間性を (moment というかたちで) 含む。(2)瞬間性にもとづく行為的時間は、持続と空間の関係から説明可能である。いまや、これを明らかにしなければならない。

持続と空間の関係において鍵となる概念は、第一に「同時性」 (simultanéité) である。第一著作『意識の直接所与についての試論』 (1888) と第四著作『持続と同時性』 (1922) から、それぞれ目につく箇所を拾ってみよう。

(A) 持続なき現実的空間が存在し、そこでは諸現象が、われわれの意識状態と同時に現われては消える。現実的持続が存在し、その異質的瞬間 (moment) は浸透し合っているが、各瞬間はそれと同時の外界のある状態に近づけられることがあり、またこの接近自体の効果によって他の瞬間から分離することがある。……空間と持続という両項の連結線は同時性であり、同時性とはいつてみれば、時空の交差点 (intersection) であろう。(D I 82)

(B) われわれは物質的世界を知覚し、この知覚は、当否は別にして、われわれの内にあると同時にわれわれの外にあるように思われる。……こうして、われわれの内的生の各瞬間 (moment) には身体の瞬間が対応し、また内的生と〈同時〉 (simultanè) であるような周囲の全物質が対応している。そのさい周囲の物質は、われわれが意識する持続の性質を帯びているように見える。(DS 55 ~ 56)

(A) と (B) の間にある三十年以上の隔りは、同時性をめぐる存在論的背景の明らかな変化を告げている。『試論』における同時性は、持続なき空間と延長なき持続とを結ぶ「交差点」と考えられている。ここにあるのは、内一外の領域的二元論である。これに対して、『持続と同時性』における同時性は、内的生—身体—物質的世界の三項関係を成立させるものと考えられている。ここでは内と外が知覚において重なり合い、空間的である物質までが意識の持続性に与るとされている。こうした相違は、いかにして説明されるだろうか。

『試論』の二元論では、持続と空間とは、その本質的位相において互いに還元不可能である。ところが、探究の出発点は現実的所与であり、これは持続と空間を特徴づけるような非延長と延長、質と量が混合された水準である。してみると、最初に対立を前提するか、それとも一致を前提するかによって、互いに反対の手続きがとられることになる。前者の場合には、持続と空間の結合が問題になり、後者の場合には分離が問題になる。この二重の関係を整合的に説明する立場が打ち出されない限り、同時性はあいまいで両義的な性格に留まらざるをえない。同時性は時空の「滲透現象」 (phénomène d'endosmose) を意味するだけでなく、「切り離

された状態」(intersection)をも意味するからである。

持続と空間との存在論的な連続・非連続の関係は、領域的二元論の立場からでは説明されない。基本的な存在経験の意味を新たに問い直すということが、ここで必要になってくる。第二著作『物質と記憶』(1896)の意義は、何よりもそこにあると思われる。ベルクソンは、ここで『試論』の出発点であった現実的所与の混合的水準そのものを、積極的に規定しようとする。それが、彼の独自のイマージュの理論である。

「存在とはイマージュである」というベルクソンの主張を詳細に辿ることはできない。ここでは、イマージュが「物と表象の中間(mi-chemin)に位置する存在」(MM 1)であるとされる、この中間性という一点に絞って考える。観念論的な表象と实在論的な物との中間にあるということは、イマージュが物でも表象でもありうる、といった単なる二重性格をもつということではない。物や表象を認めるならば、物が表象でなく表象が物でないことも認めねばならない。したがって、物であると同時に表象でもあるというような存在は、考えられない。しかるに、物と表象の〈中間〉であるということは、物や表象の存在を前提しなければ、いわれないことである。それゆえ、イマージュ説においては、物や表象の存在意味が保証されつつ、なお、そうした物や表象に還元されない、独立した——中間的な——意味水準が指定されなければならない。

イマージュに固有な存在論的意味とは何か。それは身体である。身体性に基礎づけられることによって、イマージュのもつ物質性と観念性の両面が統一されると考えられる。ごく簡略に図式化してみよう。身体は物質的世界にはまり込んでその一部をなしており、それ自体が一種のイマージュである。しかしそれは、単に部分的なイマージュではなく、常に周囲の物質に働きかける行動の中心であるという意味で「特権的なイマージュ」である(cf. MM 20—21)。身体がイマージュの中心であるのは、「私の身体」(mon corps)であるためであり、それゆえ知覚は常にパースペクティブを伴うことになる。

身体は、かくして二種の関係に立つ。すなわち身体は、全体一部分の関係において物質的に決定されているとともに、中心—周囲の関係において意識的に決定する——つまりイマージュを選択し、限定する。ベルクソンにおける身体概念は、主体的な決定と客体的な決定の統一という性格をもっている。だがベルクソンは、テキストの記述を追う限りでは、かかる統一の根本的解明を与えていないと思われる。『物質と記憶』には身体が存在論が欠けている。この課題は、さらに第三著作『創造的進化』(1907)に持ちこされたかと考えることができる。私はこの著作を、身体についての歴史的・存在論的な研究として解釈したい。

生命進化を一言でいえば、原初的な意識である生命の流れ（*courant de vie*）が、個性（*individualité*）と連合（*association*）の二重傾向をもつ有機体、つまり身体を、産出してゆく過程に他ならない（cf. EC 261）。ここでは身体は生命の表現であり、自己決定をなす主体と考えられている。身体は、エラン・ヴィタルにおいて新たな身体を産出する。かかる身体の産出という行為において、イマージュが表わす二種の関係、主体的決定と客体的決定の統一が説明される。なぜなら、すべての身体は、自ら産出するものであると同時に、それ自体産出されたものを意味するからである。詳しくは後に論じるが、身体がイマージュの中心であるということは、それが物質にも観念にも還元されない存在論的次元としてあるということであり、またそれは、身体がイマージュの関係性を根源的に決定する場所としての本質を具えているということである。

かくして、引用(B)が示すように、内的生と物質的世界を媒介するものは、身体でなければならない。個々の身体は空間的に孤立しているが、原初的な生命の流れを「非個人的意識」というかたちで、すべての他者と共有していると考えられる（cf. DS 56）。『持続と同時性』における「普遍的時間」（*temps universel*）の仮説は、身体的に成立する「直観的な同時性」「現実的な生きた同時性」（DS 116）によって基礎づけられている。それゆえ、われわれは、逆に身体をく受肉せる同時性と呼ぶこともできよう。

III

行為的時間は、持続・同時性・空間の連関において、あるいは意識（生命）・身体・物質の連関において説明されなければならない。確かにバシュラールのいうとおり、行為には決断や否定の契機が存する。決断や否定が瞬間的であるなら、行為もまた瞬間的でなければならない。問題はく瞬間くとして意識される経験の内容、意味である。

ベルクソンが二種の瞬間性を区別したことは重要である。持続に内的な瞬間（*moment*）と持続に外的な瞬間（*instant*）は、同時性によって対応関係をもつ。「実の時間なしには点は点でしかなく、*instant* は存在しない」（DS 69）。「空間化された点を含む時間が、実の時間に刻みを入れ、そこに *instant* を生ぜしめる」（*loc. cit.*）。瞬間経験の意味統一は、かかる対応関係によって保証されている。しかしこの経験は、矛盾した性格を孕まざるをえない。なぜなら、持続と空間とは、本質的に非連続なものとして、ここで相交わるからである。それゆえ瞬間の経験は、二つの側面からなっている。ひとつは、持続と空間の具体的統一であり、もうひとつは持続と空間の相互差異化である。われわれが瞬間を生きるさいの様々なニュアンス——たとえば、充実と空虚という相反する性質の混在——は、瞬間経験自体の二面性を表わし

ている。やや抽象的にいうなら、瞬間は外延的な無と内包的な無限大との矛盾的統一とでも称しうらう。プラトンが、瞬間性としてのτὸ ἐξαίφνης(突然)を以て、「いかなる時間の中にも無い奇妙な(ἄτοπος = 場所をもたぬ)あり方」(『パルメニデス』156d~e)としたこと、あるいはキルケゴールが、「瞬間は本来時間のアトムではなく、永遠のアトムである」(『不安の概念』)と主張したことが、ここで想起される。ベルクソンの二分法においては、空間は量、持続は質のカテゴリーによって特徴づけられる。したがって、瞬間経験における量的契機が instant であり、質的契機が moment であるといつてよい。

さて、ここまでわれわれは、ベルクソンの存在論における中間項、媒介項に着目して同時性や身体の問題を追ってきた。行為的時間が身体性に依拠し、その証拠として瞬間が生きられるということは、いまや明らかである。だが問題は、行為と時間との形式的な結びつきではなく、この結合自体の意味である。私の行為とは何であるのか。何ゆえに私は行為するのか。本来問われるべきは、こうした問題である。これを考えるためにも、ベルクソン哲学の全体的志向を、持続の概念を中心として明示する必要がある。

くりかえしていうが、ベルクソンの探究の出発点は、現実的具体的なイメージである。彼の努力は「直接所与」をめざし、自由の事実を確立することにある。〈直接的〉ということをも単に〈無媒介〉(im-médiat)の意味にとるなら、この努力は誤解されたことになる。⁽³⁾直接所与ないし自由は、あくまでも探究の対象だからである。イメージは混合的水準を示している。だが問題は、単なる分析ではない。空間性による諸制約が、もっぱら持続の汚染原因として意識されるということは、この探究が分析である以上に価値定立の過程であることを意味している。それは他ならぬ直接的なものの力に導かれて可能であるという意味で、自覚の過程であるといえる。⁽⁴⁾分析が知性的であるのに対して、自覚は直観(intuition)にかかわる。直観は現実の否定における価値の肯定の働きであり、自明性と努力の両方を表象するのである。⁽⁵⁾

持続と空間とは、価値の観点において明確に差別されている。持続と空間とは、存在論的に非対称的な関係に立つ。存在を領域的にとらえる限り、このような関係は理解しがたいであろう。これを理解するためには、発生論的な見地に立たなければならない。『物質と記憶』において、意識水準の相違として、精神=緊張(tension)と物質=弛緩(détente)とが区別されたとき、持続に根源的な性格が付与されたと考えてよいだろう。持続のもつ根源性は、『創造的進化』のエラン・ヴィタルに至って明らかとなる。ここでは持続はもはや心理的な概念ではなく、生命の産出原理を意味するものと考えられている。これに対して空間は、産出された物質に固有な広がり(extension)の極として考えられる。単純化していえば、持続と空間との関係は、能産・所産の関係ということになる。

ところで身体は、先述したように自ら産出するものであるとともに、それ自体が産出されたものである。〈産出〉のカテゴリーは、生物学的な生殖から、文化一般とりわけ芸術における作品の創造までを含む。したがって、産出されるものは、別の身体でもあり、またイメージでもある。ただし、身体そのものがイメージなのである。創造的行為としての産出を生命の側から見れば、それは身体という場所において生自体が表現を行なうこと、つまり新たな身体を創出することに他ならない。他方、身体の側から見れば、創造とは力の自覚であり、自らが努力しつつ働くという事実である。この事実が、イメージの産出ないし決定に他ならない。もう少し詳しくいえば、創造はわれわれにとって、産出された物と産出自体の意味である。作品は持続の意識において生み出されると同時に、意識を決定する。つまり、創造の質が作品をつうじて明らかとなるのである。かくして創造の主体である身体は、意識と物質、持続と空間が相互規定をなす「連結線」、イメージが生じる〈場所〉であるといえよう。

ここには、いわば生の弁証法を認めることができる。まず根源的な生命は、身体において自らを表現し、身体は持続の意識において生命と共感する。ここには存在論的な連続の関係がある。一方身体は、産出されたもの、空間的に決定された物質存在として、生からの距離を保つ。生に固有な超越の方向が「精神性」(*spiritualité*) とされるのに対して、身体の「物質性」(*matérialité*) はこれと逆方向をめざす(cf. EC 202)。ここには存在論的な非連続の関係がある。創造は、生と身体との連続・非連続の関係において、瞬間的な「飛躍」(*élan*) として生じる出来事である。

IV

時間とは何か。ベルクソンは、時間を純粹持続とみなした。このことは一般的了解に属する。だがわれわれは、空間性の否定としての持続ではなく、行為的時間を問題にする。持続が行為的時間を構成する〈意味〉のひとつであることは、上に述べた〈生の弁証法〉からも明らかである。すなわち持続は、自由な行為ないし創造に参与する意識を表わす。ベルクソンは、時間性の本質をかかる創造的意識に定位させたのである。しかし、行為的時間の全体は、身体性にかかわる構想力あるいはイメージの問題として考えなければならない。

行為的時間は、行為の主体である身体、構想力の座である身体によって産出されるイメージと考えられる。そこには当然のこととして、過去・現在・未来の時間契機が含まれる。「私の現在とは、私が身体についてのもつ意識である」(MM 153)。また身体は、直接的過去(感覚)と直接的将来(運動)との統一をなす。それゆえ、かかる身体において、「過去が将来を嚙むつかみがたい進行」(MM 167)、すなわち時の流れが形成される。この時の流れは、身

体の未来企投と同時に生じてくるイマージュであり、しかも常に身体をその中心つまり〈現在〉に置くイマージュであるから、根本的に分節された流れである。

行為する身体によって成立する時間地平は、もとより創造的意識を離れては考えられない。身体の現在性は、生命の産出原理と世界空間との同時性による意味連関を表わしている。持続と空間とは、この意味連関の対極として理解される。それゆえにまた、空間は単に創造を否定するものではなく、「創造の自由」(*latitude de création*, EC 339)をも意味しうると考えられる。他方同時的な世界空間は、私の意識にとって拘束となるもの、状況の意味している。私が身体をもつ存在であるために、この状況からは逃れることができない。なぜなら、私の身体そのものが、刻々に状況をつくり出しているからである。私のイマージュは、未来性としての主体的決定と過去性としての客体的決定とを、同時的に意味しうる。ここにおいて、行為的時間に固有な契機である決断の瞬間が現れるのである。

決断の瞬間を図式的にいえば、空間と持続との対称的な意味連関、つまり空間と持続とが相互に疎外しながら、しかも相互に必要とし合うような関係として把握しうるだろう。持続内の瞬間(*moment*)と、持続外の瞬間(*instant*)とは、この関係の乖離性において始めて区別されるような観念である。

しかし、決断とはいかなる事態であろうか。ベルクソンは既に『試論』において、「何らかの重大な決断を行なった自己の生涯のあの瞬間に遡って考える」(DI 179)ことが、自由を理解する鍵である旨を述べている。決断そのものは否定されていない。ただし、決断の意味は自由の自覚の内に包摂されると考えられている。自由とは直接的に働く力であり、それが、あれかこれかという問題自体を解消することを、ベルクソンは信じたといえる。かかる力を信じえたことの背景には、ベルクソン自身の思索の集中が物語るような超人間的努力、苦行がひそむことは看過されない。実存的な賭けや偶然的選択の観念は、容易に行為の意味を見出しえない今日の状況にあって、われわれには親しいものとなっている。ベルクソンの自由は、しかしそうした観念の自己完結を許すような人間的条件そのものを突破する地点に出現する。それを可能ならしめる力は〈愛〉の自覚であり、そこに生じる出来事は、決断というよりも〈飛躍〉である。

行為とは飛躍である。飛躍は、決断の意識が偶然性を超えて愛の意味水準を獲得する自覚とひとつになった働きである。「愛の飛躍」(*élan d'amour*)は、それゆえ、自由と必然とが一致した行為、いわば〈運命〉を意味することになる。だがここでは、ベルクソン最後の主著、『道德と宗教の二源泉』(1932)に立ち入ることはすまい。いまは、ひとつの問いを以て結論に代えておこう。ベルクソンの自由の意味を信じると否にかかわらず、われわれは行為しなければならぬ。また、決断しなければならぬ。だとすれば、何のためにか、何に向かって

註

ベルクソンの著作を引用するさいには、次のように略記し、単行本の頁付のみを示した。

DI: *Essai sur les Données immédiates de la Conscience*, 1970.

MM: *Matière et Mémoire*, 1968.

EC: *L'Évolution créatrice*, 1969.

DS: *Durée et Simultanéité*, 1968.

PM: *La Pensée et le Mouvant*, 1969.

- (1) Bachelard, G. *L'Intuition de l'Instant*, Gonthier, 1979. 以下引用のさいには、II と略記する。
- (2) アインシュタインの特殊相対性理論の時間概念に対して、ベルクソンは生きられる同時性の立場から普遍的時間を擁護する。他方バシュラールのベルクソン批判は、相対論的な時間の多様性を容認することが動機になっている。「正確な意味での瞬間は、アインシュタイン説においても絶対であることには変りはない」(II 30)
- (3) 〈直接所与〉の媒介的性格は、注釈者が夙に指摘するところである。たとえばチャペックは、ベルクソンのいう *immédiat* が、「事実上」ではなく「権利上」のものであると説く。
cf. Čapek, M, *Bergson and modern physics*, D. Reidel. 1971, p. 86.
- (4) ベルクソン自身の説明によれば、「直接的なものの力とは、問題を除去することによって対立を解消する能力のことである。この力の外的な現われによって、直接的なものについての真の直観が、それとして見分けられるのである」(Lalande, A, *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*. P. U. F., 1976, p. 475)。直観が自覚であるとすれば、内的持続が〈直接所与〉であるというベルクソンの考えには矛盾は存しない。
- (5) 直観が、現実所与つまりイマージュを手がかりとする「否定の力」(*puissance de négation*)であることを、挙げておこう。cf. PM 120.

Instant, simultanéité et durée —Bergson et le temps d'action—

Nobuo Kioka

La durée bergsonienne, dit-il Bachelard, n'a pas d'*instants*. Comment pourrait-on décider alors son propre action dans le temps qui ne s'arrête pas?

La durée pure dont les moments hétérogènes s'interpénètrent peut se communiquer avec l'espace par la *simultanéité*, et pour cela même chaque moment se sépare des autres. D'autre part, instantanéité impliquent deux chose selon Bergson, une continuité de temps réel (durée) et un temps spatialisé (ligne). Il y aurait donc une correspondance de signification entre l'idée de l'instant et celle du moment.

La simultanéité, l'intersection du temps avec l'espace, c'est actuellement vécue en *mon corps* qui serait le milieu entre la vie intérieure et le monde matériel. Et mon corps, à la fois matériel et conscient, toujours occupe un centre d'action, c'est-à-dire celui d'ensemble d'*images*. Je voudrais appeler mon corps un *lieu* spécial où toutes les images se produisent, parce que mon corps, l'image déterminée lui-même, exprime aussi le pouvoir de se déterminer. En bref, mon corps est le siège d'imagination. Il est donc naturel que l'image du temps qui s'écoule du passé à l'avenir se forme en mon corps, car il ne peut être que mon *présent*.

Qu'est-ce que le temps d'action chez Bergson? La philosophie bergsonienne de durée attache de la valeur à décision d'action (cf. *Essais*, p.179), mais ce décision signifie pour Bergson l'acte libre accompli dans la durée réelle. Pourquoi? Parce que la durée est sentie en nous comme la force créatrice, et cette force agissant avec le sentiment d'amour nous fait surgir l'instant privilégié, en d'autre termes l'*élan* d'amour.